

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 岩井 拓朗

本論文は、カント『純粹理性批判』『超越論的分析論』で展開される判断と経験に関するカントの洞察を明確にすることを目的として、近年の英米哲学におけるカント研究の成果も踏まえつつ、「超越論的分析論」のとりわけ「経験の類推」の叙述を丹念に読み解き、判断の成立に経験が不可欠とするカントの主張の意味を明らかにした意欲的論考である。

序論のあと、第1章「超越論的分析論とその文脈」ではまず、「判断がその対象に関わるのはいかにしてか」という問題が、マクダウェルの言い方に倣い、「判断の志向性の問い」として設定され、この問いと「超越論的分析論」との関係が示される。また第2章「経験の類推」と判断の志向性の問い」では、とりわけ「経験の類推」の理解にとって「判断の志向性の問い」が重要であることが指摘されて、本論文の準備作業が整えられる。続く第3章から第5章までは「経験の類推」の第1類推から第3類推までのカントの叙述の詳細な検討である。第3章「実体と客観性—第1類推—」では、エヴァンズの考察が参照されつつ、自分の経験が、自分の経験に依存せず存在する客観的なものについての経験であることへの理解が、「客観性の理解」として見定められ、この理解のために「実体」の理解が不可欠であることが示される。第4章「因果と変化—第2類推—」では、「客観性の理解」が変化の経験において生じるための必要条件が「因果性」のカテゴリーであることが明らかにされる。第5章「相互性と同時存在—第3類推—」では、複数の事物の同時存在が経験され理解されるためには「相互性」のカテゴリーが必要であるとのカントの主張の内実が検討される。さらに、第6章「カント的空間論とモダリティ—「直観の公理」—」では、「直観の公理」が参照されつつ、第3類推でカントが考える空間的把握が特定の感覚(モダリティ)に依存するものではなく、経験成立の必要条件となりえていることが明らかにされる。また第7章「自己認識と世界—「観念論論駁」—」では、「観念論論駁」を中心にして自らの知覚に関する認識についてのカントの理論が検討され、それが「経験の類推」と調和的なものであることが示される。最終第8節「世界について判断するために」では、第1章で設定された「判断の志向性の問い」へのカントからの答えが提示される。カントの考える経験は、知覚が知覚とは独立に存在する対象に関わっていると「客観性の理解」を含むものであり、まさに「経験の類推」において、実体、因果性、相互性という3つのカテゴリーがこの理解の必要条件であり、世界についての判断の成立条件であることが明らかにされている。なお、この「客観性」の理解は、デイヴィドソンとは対照的に、他者の概念を必要としない。かくして本論文の考察は締めくくられる。

試問では、論者の解釈とカントの超越論的観念論の立場との関係や、因果性に関する論者の理解、「志向性」という概念の内実等について質疑がなされ、今後の研究上のいくつかの課題が明らかとなった。しかし全体としては、マクダウェル、デイヴィドソン、エヴァンズ等、近年の英米哲学におけるカント研究を十分に咀嚼しつつ、『純粹理性批判』『超越論的分析論』のとりわけ「経験の類推」のもつ現代的意義を明らかにした意欲的な論考として、本論文は高く評価された。よって本論文は、博士(文学)の学位を授与するに十分に値するとの見解で、審査委員全員が一致した。